

その他

「津軽学—歴史と文化」の授業を終えて

「津軽学—歴史と文化」の授業へのフィードバック

この授業がユニークであることは、多才な講師陣からもわかる。地域を代表する伝統芸術家をはじめ、青森県の「高大連携」による津軽文学シリーズなど、地域密着型の授業も特徴の一つである。この授業を履修した学生だけでなく、多くの方にも共有してもらうために、学生による「受講生からのフィードバック」の中から一部を選んで、以下に紹介する。臨場感を出すために、学生の原文のままを記載する。

●弘前ねぶた絵の歴史/実演（八嶋龍仙・津軽伝統ねぶた絵師）

○話に聞いていた通り、生粋の津軽弁を話されていて、八嶋先生の魅力を存分に味わえた1時間半になりました。話し上手であるせいか、話自体がおもしろいのか、八嶋先生の世界に引き込まれました。

「無のところから創り上げることが芸術」という言葉が特に印象的だった。（人文学部 菅山真帆）

○「伝えねばまいんだ!!」という八嶋さんの師匠の言葉を聞き、涙が出そうになるくらい感動した。鳥肌が立った。そしてその言葉どおり、自分で生み出した手法を惜しみなくお弟子さんたちに教えるんだと言う八嶋さんの姿がかっこいいと思った。確かに伝わるが、自分でせっかく考え出したものをすぐにみんなに教えるなんて、私にはできない。勿体ない気がしてしまう。それが当たり前ができるからこそ、また自分が進んでいくという逆転の発想ができる八嶋さんを尊敬する。

（教育学部 齋藤芙裕美）

●津軽三味線の歴史と実演（笹川皇人・津軽三味線奏者）

○私は小さい頃から、三味線とか手踊りが好きだったので、今回身近で演奏を聴けて良かった。津軽じょんから節は荒々しく聴こえるが、その中に包みこんでくれるような温かさを感じられた。津軽三味線には楽譜がないということが驚きだ。これも伝統として守り伝えていくことの表しなのだろうか。何だか自分も三味線がやりたくなった。（人文学部 須藤真由美）

○聞き入りました。とても興奮した。調弦にリズムがあるのがおもしろいと思う。楽譜がないと知り驚いた。即興で曲がぱっと出来てしまうなんて信じられません。ポジションを何を手掛かりに定めて音を出しているのか不思議だった。そもそもドレミのような音階があるのか。最近色々な楽器と一緒に演奏されたりしているが、どうやって合う音をさがすのか。私も今、弦楽器を練習しているので、とっても興味深かった。ぜひ一度弾いてみたい。期待していた通り、生演奏はすごく楽しいものだった。この授業をとって良かった。三味線もねぶた絵と同様、守っていくためには、文化、風土を忘れず、変化を続けなければならないと思った。（人文学部 平岡 志保）

●旧制官立弘前高等学校外国人教師館と洋風建築（芳野明・教育学部助教授）

○弘前外国人教師館は記録類がほぼ完全に残る貴重な作例である。設計は大正時代の弘前を代表する棟梁の一人である川元重次郎と、津軽藩の城大工の家系で函館で洋風建築を学んだ堀江佐吉である。なぜ弘前には洋風建築が作られ、そして今もお残っているのか。建てかえる金がなかったからか。大事な物は物を先入観なしの一つ一つ観察すること。「津軽だから」という理由をつけると、そこで考えるのが止まってしまいます。構築主義が重要。（教育学部 原 真奈美）

○芳野先生が外国人教師館を残すように頼んで、今残されているのを知り、この建物が多くの人の力によって助けられたものだということを知った。弘前には数多くの洋風建築がある。その中でも、実際

に外国人が住んだ洋風建築が私たちのすぐそばにあるということはとても貴重なことだ。しかし、学生の中には外国人教師館を訪れたことのない人が多くいるだろう。恥ずかしながら私もまだ行ったことがないからだ。今回芳野先生に詳しく話を聞かせていただいたが、この授業で実際に外国人教師館へ行って説明を受けてもおもしろかっただろうと思う。また、外国人教師館へ行く機会として基礎ゼミの時間を使うのもいいのではないかと思う。せっかく多くの人によって残されたものなのだから、私も一度は必ず訪れたい。
(教育学部 叶内 由貴)

●石坂洋次郎『青い山脈』（館田勝弘・前弘前中央高等学校校長）

○石坂洋次郎という人を私は知らなかったが、この講義を受けてとても興味をもった。戦争真ただ中のこの時代、彼のような人間はとても生きにくかったに違いない。自分の好きなことを書けば法に触れるとして捕まり、恋愛をしては変な目で見られ。時代が時代なら、彼はもっとのびのびと作家生活を送れたのかもしれない。しかし、逆に言えば、彼にとってその境遇は必然だったのかもしれない。それは彼の中にフラストレーションを作り、それが彼に作品を書かせる大きな原動力になったのではないかと、私は思う。
(人文学部 武藤 千恵)

○石坂洋次郎の作品の中で『金魚』が気になった。この作品は私小説の神様であり、師である葛西善蔵との関わりについて描いた作品である。この作品に石坂は「葛西善蔵を越えたい」という思いを込めた。どのように葛西善蔵を描いているのだろうか。また、『青い山脈』では時代と同時進行で章が進んでいく。石坂の作品に触れてみたいと思った。
(農学生命科学部 須藤 彩)

●旧制弘前高等学校の太宰治（相馬明文・黒石高等学校教諭）

○作家井上靖が文章オリンピックが仮に存在したならば、日本代表は太宰治であると言ったという。そんな彼の表現上の魅力は二項対立、否定・反語・逆説いわゆる「仮装の表現」である。この仮装の表現を形成確立し、偉大な作家「太宰治」の基礎を築いたのが、旧制弘前高校時代の津島修治であった。当時の代表作は「無間奈落」「地主一代」。
(人文学部 有安由希子)

○高校時代の太宰の作品は「無間奈落」から「地主一代」までである。太宰の作品に目を通すと、その一文一文の表現にずっしりとした重みがある感じがする。それは太宰の生き方が影響しているのだと思う。家族との関わり、何度も繰り返した自殺未遂、芥川龍之介の死…。こういう出来事が作品に重みを与え、現在にも名を残す要因となっているのだと感じた。
(農学生命科学部 須藤 彩)

●津軽方言詩（山田 尚・詩誌「亜土」主宰）

○高木恭造は福士幸次郎に「共通語も良いけれど、自分が普段使っている言葉で書け」と言われて方言詩を書き始める。『まるめろ』が英訳されて出版される。その後読者から「感動しました!」という手紙が届く。『まるめろ』には暗い現実でも、目の色、肌の色は関係ないのだというイメージが込められており、人は皆悩んでいるということが伝わってくる。方言詩を書く人は少なく、これから先、消えていくかもしれない。そのため我々は語りついでいかなければならない。津軽弁は美しい!
(教育学部 原 真奈美)

○津軽弁は非常に独特なリズムで味わいが深い。福士幸次郎は、そんな津軽弁に目をつけ、明治以降西洋の訳詞が広まっていた詩の世界に津軽方言詩を発表する。日常つかっている言葉で出す味わいがあった。それは、しかし周囲には受容されなかった。地方における偏見と差別が垣間見られる歴史の一端として、津軽方言詩は闇に埋もれるかと思った。その時、福士の意志を継ぐように高木恭造が登場する。彼の活躍により津軽方言詩は徐々に注目を浴びはじめる。彼の作品の中で「冬の月」という詩がある。標準語ではスラリと読んでしまいがちなその詩は、山田尚氏の朗読によって、情景が思い浮かび、今まで味わった事のないような言葉の雰囲気感動できてしまう。地方性が注目されるには、まず文化を育てる事。津軽弁は、地方の文化をふまえた味わいのあるもので、後世へと育てる価値のあるものである。
(人文学部 小林 貴子)

●寺山修司の世界—寺山修司と青森—（櫻庭和浩・青森北高等学校教諭）

○寺山も太宰も、故郷を憎み、そして愛していた。この2人の共通点として、幼少期の体験から、人とは少し違った感性を持つようになったことが言える。寺山は虚構の癖があったようだが、逆に捉えると想像力豊かであると言える。それが俳句や戯曲など広範囲にわたって活躍した寺山のベースとなっていると感じた。「職業は寺山修司」という言葉からは、自分は他の何者でもないという、揺るぎない自信が感じとれた。
（人文学部 須藤真由美）

○私は今までに何度か「寺山修司」という名前を耳にしたことがあったが、様々な分野で作品を残しているとは知らなかった。寺山修司はまるでマルチ人間だ。このような人の原点が青森県にあったとは驚きだ。彼の「人間は中途半端な死体として生まれ、完全な死体となっていくのだ。」という言葉が非常に心に残った。
（農業生命科学部 須藤 彩）

●現在活躍中の文学者—長部日出雄、鎌田慧、三浦雅士を中心として（齋藤三千政・大鰐高等学校校長）

○これまで4回、文学についての講義があったが、今回の話を聞いて、全て繋がったと感じた。皆どこかで出会っていたり、影響を受けたりしていて、津軽という狭い地域の中に数多くの偉人がいたことを改めて実感させられた。自由な弘前高校の校風によって、青春時代の時間を自分の好きなことに使えたことが、津軽が数多くの文学者を輩出している要因だと知り、自分の時間の使い方を改めて考えさせられた。
（人文学部 須藤真由美）

○長部日出雄、鎌田慧、三浦雅士の3人は弘前出身である。齋藤先生はこの3人を含めた陸羯南から始まり三浦雅士までの作家の流れを「北の文学連峰」と名付けた。この作家の山はみな独立しているのだが、登りはじめてみると、必ずどこかでつながっているという。芸術家の棟方志功まで巻き込んだこの「北の文学連峰」は津軽から東北全体の豊かな風土が生み出したものである。
（人文学部 有安由希子）

●旧制弘前高校の歴史（前島郁雄・東京都立大学名誉教授）

○全国に約30しかない旧制高校は、7つの帝国大をうける権利がある。しかし、帝国大に合格していながらも高校を卒業できなければ、合格はとりけしになってしまう。また、旧制高校の授業はとても厳しく、今の時代では考えられない。「太宰治が旧制弘前高校に通っていたことは有名だが、太宰は卒業生4747人のうちの1人でしかない」と前島氏は語る。太宰は作家として花開いたが、それ以外の分野で活躍した人はたくさんいる。個性と才能あふれる旧制弘前高校生だった彼らは、わずか3年間の思い出を胸に、今でも5年に1度ここ弘前にやってくる。「Home Coming Day」よき友だち、忘れない恩師たち、支えてくれた街の人たちに会いに。
（人文学部 小林 貴子）

○1920（大正9）年、官立弘前高等学校設立。北海道や東北を中心として、全国各地から様々な生徒が弘前高等学校に集まった。先生のドイツ語のノートや当時の話の様子から勉学にはかなりの努力が必要だったようだ。しかし、勉学一筋という生徒だけでなく、人のために自身の身を犠牲にしてまで行動する生徒が多くいたという話を聞いて感動をした。私も4年間の大学生活で多くのことに挑戦し、自分の力を最大限に伸ばしていきたい。
（農学生命科学部 須藤 彩）

●弘前藩の歴史と文化（長谷川成一・人文学部教授）

○江戸時代の大名は、そのほとんどが室町～戦国時代の下剋上により這い上がってきた者達であるそう。津軽氏も同様に「寛永諸家系図伝」において、政信以前は認められていない。弘前藩は北狄の押さえとして、アイヌに威風をしめし、重要な拠点であった。注目されていた藩の正統性を示すために、天皇に次ぐ高い血筋の近衛家に政信は養子に入った。近衛家に由来があるから津軽家の家紋は牡丹なのだ。氏姓制度の中でいかに自分の血筋を高くするか計算していたことに関心を持った。
（人文学部 須藤真由美）

○津軽の歴史について、こんなに聞きやすい授業は初めてだった。アイヌとの交易があったことや、シャクシャインなどの北海道、蝦夷地に関係していたので、私にとっては、とても興味深い内容だっ

た。この間、弘前市立博物館へ行ってきた。その時、津軽藩の歴史についての資料が絵巻などを見ていたので、今回の授業がとても自然と体の中に入ってきたため、またききたいと思える授業だった。資料もおもしろいものが多くてよかったと思う。
(教育学部 笠原絵里子)

●津軽塗の文化と歴史/実習(佐藤武司・弘前大学名誉教授)

○江戸時代、明治時代、そして現在の津軽塗の技術や塗られる対象物などを比較すると、ずっと変化せずに受け継がれてきた部分と、古いものが取り払われ、新しいものが取り入れられている部分があった。伝統とは普遍的なものというイメージがあるが、このへんこそが生きた伝統なのである。また、福井県小浜の若狭塗が津軽塗の起源であること、実際に塗りの手本板を見て津軽塗の技術を知ることができて興味深かった。
(人文学部 須藤真由美)

○漆器の美しい艶は漆と研磨によって生まれていることが分かった。実際に研磨の段階をやってみても大変だと思いました。何種類もの紙やすりを使い、力いっぱいすみずみまで磨くことを知り驚きました。真剣にやり、とても疲れました。でも完成したときはとても達成感も味わえ、素人なりにきれいに仕上がったと思います。こんな素敵な津軽塗をこれからも大切に伝承して行ってほしいと思いました。とても楽しかったです!!!
(教育学部 蒲地小百合)

授業後の感想文

「津軽学—歴史と文化」の授業に関する感想を多くの履修生が寄せてくれた。それらのほとんどが好意的なもので、今後の授業の参考になるものも多くみられた。その一部を以下に紹介する。

○私は今津軽学の講義を終えて感じているのは、津軽学という授業を受けてよかったということだ。振り返ってみると、様々な文化について学んだと思う。ねぶた絵や三味線、津軽の文学者、そして津軽塗など…。それぞれにおもしろさがあったが、最も感動したのは本物のねぶた絵を間近で見ることができたことだ。あの迫力のある筆使い、色使いに圧倒された。あの時の感動はずっと忘れないようにしたいと思う。私は津軽学を受ける前と後で自分の中の何かが変わったような気がする。私は大学入学をきっかけに初めて青森に来て、津軽地方で暮らし始めた。大学生活を送っているうちに、自然とねぶた祭のことや津軽三味線のこと、旧制弘前高校のことが身に入ってきて、津軽の文化についてちょっとわかったような気がしていた。しかし、津軽学を受けて、津軽には様々な文化があり、「津軽の文化は○○だ」と一言では語れないと思った。今年の夏、ねぶたを初めて見たのだが、今年は津軽学を受けたことで、違った味わい方ができそうな気がしてすごく楽しみだ。私にはまだまだ津軽についてわかっていない部分がたくさんあると思う。でも、津軽学を受けたことで弘前で送る4年間の大学生活がもっと充実したものになっていくような気がする。また自分でも弘前で過ごす時間を大切にしていきたいと思う。そして地元に戻ったときは、地元の文化を大切にしていきたい。

(農学生命科学部 須藤 彩)

○津軽学を受けて、今期私が受けていた21世紀科目の中で一番内容が充実していたのではないかと思える程、いい経験ができたと思う。津軽学がなぜ特設科目なのか不思議に思った。津軽学を開設して下さった土持先生と、貴重な話をして下さった沢山の講師の方々に感謝したい。(抜粋)

(教育学部 小笠原真希)

(文責：土持法一)